

# 中学野球における運動部活動とクラブチームの比較

## ～上一色中学校野球部と江戸川中央リトルシニアを事例として～

生涯スポーツゼミナール 1316022 後藤大輝

### 1. 研究動機・研究目的

大勢の野球人が野球人生において「高校野球で甲子園に出場すること」を目標にし、高校野球を一区切りと考えることが多い。そのため、高校時代の選手育成が重要であることはもちろんだが、高校野球の前段階である中学時代における選手育成が大変重要だと考えた。中学生が野球をプレーする組織は、大きく分けると学校運動部活動とクラブチームに2分されており、特にシステムの異なるそれらの2つのフィールドを比較したいと考えた。まだ中学生である選手たちが、どのように野球というスポーツに関わり、どのような環境で、どんな思いで、活動しているのかを明らかにしたい。また、それぞれの選手たちがどれだけ現在の活動に満足しており、どういったところに不満を持っているのかを明らかにしたい。そして、今後の選手育成のあり方を考える上でこの研究が参考になればいいと考える。

本研究では、中学野球のフィールドである学校運動部活動とクラブチームの現状を把握かつ現状の改善、また野球界の発展につながればよいと考える。

### 2. 研究方法

本研究では、東京都江戸川区を主な拠点としているクラブチームの江戸川中央リトルシニアを中心に調査し、比較対象として運動部活動の江戸川区立上一色中学校の軟式野球部に、それぞれの選手に対してアンケート調査をした。調査期間は、令和元年8月上旬であり、調査には調査用紙を使用した。

### 3. 主な結果と考察

まずは、有意差の認められた項目の結果をみていく。指導者についての2つの質問において、三段階のうちもっとも大きな有意差が認められた。このような結果になった理由としては、運動部活動では指導者が運動部活動の顧問であると同時に、学校の先生であるということが挙げられると思う。そのため、運動部活動以前に学校の先生であるということ意識している選手が多いのではないかと思った。また、クラブチームでは大学生がコーチを務めたりすることも多く、年齢も近いため指導者との距離が近く、指導者に対して意見や質問がしやすい環境にあるのではないかと考える。そのため、クラブチームより運動部活動の方が指導者の存在は大きく、絶対的な存在であることがわかる。

また、運動部活動の選手が運動部活動とクラブチームをどのようなイメージを持っており、クラブチームの選手が運動部活動とクラブチームをどのようなイメージを持っているかという質問においても、三段階のうちもっとも大きな有意差が認められた。これに関しては、予想通りの結果ではあったが、運動部活動で活動している選手はクラブチームより運動

部活動にポジティブな印象を持っており、クラブチームで活動している選手は運動部活動よりクラブチームにポジティブな印象を持っていることがわかる。もちろん、選手自身が所属しているチームのことにポジティブな印象を持つことは当然のことではあるが、リーグやボールが違うなどが原因で、運動部活動とクラブチームの交流が少ないというのも理由の1つとして挙げられる。

また施設満足度では、運動部活動で36%の選手が施設に満足していないと回答しており、理由としては、「グラウンドが狭い」や「地面がボコボコしていてイレギュラーする」などの意見が多く見られた。クラブチームでは52%の選手が満足していないと回答しており、理由の多くが「草が長くてボールが止まってしまう、無くなってしまう」というものだった。このように、中学野球において、多くの選手が満足のいく施設や環境でプレーできていないことがわかる。

そのほかの質問に関しては、有意差が認められたものはなく、運動部活動とクラブチームで比較しても差は見つからなかった。

#### 4. 結論

調査を通じて、判明した点を踏まえて結論を述べていく。全体的な結果からわかることは運動部活動の選手、クラブチームの選手ともに野球が好きで、野球を楽しみながら、活動に満足していることがわかった。また、所属しているチームやチームメイトとの関係も良好であることがわかった。しかし、グラウンドなどの環境には満足していない選手も多く、環境に関しては改善していくことが必要だと感じた。有意差がみられた指導者に関する質問では、運動部活動とクラブチームでの指導者と選手との関係や指導者の存在の大きさに違いがあることがわかった。ほかに、有意差のみられた質問では、先行研究と同様に、運動部活動で活動している選手はクラブチームより運動部活動にポジティブな印象を持っており、クラブチームで活動している選手は運動部活動よりクラブチームにポジティブな印象を持っていることがわかる。この研究を通して、異質なシステムである中学野球ではあるが、まず第一に中学生の選手たちが野球が好きでできていることがわかった。しかし、中学生の選手たちがそんな想いや考えを持っているからこそ、中学野球にはまだまだ成長していける可能性を感じた。野球人が大きな憧れを持つ甲子園大会のある高校野球につながる、中学野球という育成年代ではより質の高い指導や環境が必要であると感じた。また、それが日本の野球界全体に良い影響を与え、もう一度野球人口が増加し、今以上に野球界が盛り上がることを期待する。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、多くの方のご協力を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。卒業論文を書き進める中で、苦勞することも多々ありましたが、指導教諭の黒須先生のご指導・ご鞭撻、ゼミ員の協力のお陰で無事に卒業論文を書き上げることができました。本当にありがとうございました。